

紙芝居を追い、テングサを追い

国際日本学部 歴史民俗学科 新垣夢乃

1. 紙芝居からCross-Cultural

私は、大学院生時代の2014年から神奈川大学で企画された戦時中の紙芝居の共同研究に参加しています¹⁾。と言っても、私は児童文学が専門ではなく、当時はタコ(蛸)漁について研究していました。その私が紙芝居の研究でできることは、足で稼ぐことです。日本国内だけではなく、かつて日本の植民地であった台湾でも紙芝居を探して歩きました。

そのなかで、山口正明という1930年代から台湾の子どもたちが通う小学校の教員であった人物の存在を知りました。山口は小学校で、日本生まれの自分とは異なる言語、文化のなかで育った子どもたちに、日本語や日本文化の素晴らしさをどうしたら伝えられるのだろうと悩み、紙芝居を教育現場に導入しています。

しかし、時代は戦時であり、台湾の人々の「皇民化(同化)」教育が盛んな時期でした²⁾。当初、山口の紙芝居は、『猿と蟹』などの童話を題材としたものでしたが、1935年の台湾大地震の際に「君が代」を歌いながら死んでいった台湾の少

年を題材とした『君ヶ代少年』など時代を反映した作品へと変化していきます。

そこに、台湾の子どもたちへ日本語や日本文化の素晴らしさを伝えたいという素朴な使命感に燃えた山口の異文化交流がみえてきたのです。もちろん、そこに植民地における支配する側と支配される側という関係があることは無視できません。この異文化交流のなかで、山口や台湾の子どもたちは何を考えたのか、それを知りたいと思ひ紙芝



山口正明作『君ヶ代少年』

(出典:賀来猛夫『紙芝居の演出法』台南紙芝居研究会、1941年:巻頭冒頭部分より引用)

2. テングサからCross-Cultural

居を追っています。

さて、紙芝居を追って台湾も調査地としたのが縁で、私が最初に赴任した大学は台湾の大学でした。先述のように、私は元々は漁業の歴史に関心を持っていました。そして、台湾で生活するなかで台湾にもテングサ(寒天の原料となる海藻)漁を行う海女がいて、海女は自分たちの技術は植民地時代に沖繩の人から教わったものと認識していることを知りました。

海女は、日本と韓国に固有のものだとされていたため、台湾の海女には本当に驚きました。それから、台湾の海女やテングサ漁の歴史を追いかけるようになりました³⁾。

すると、台湾の海女が語るように、植民地台湾へ沖繩からテングサ漁を行うために漁師たちがやってきていたことがわかりました。さらに、沖繩の漁師たちは台湾の人々の漁場を侵しテングサ漁を行い台湾の人々と緊張関係を抱えていたこ

と、採取したテングサを「内地人（日本本土の人）商人に販売していたこと、販売されたテングサは日本で加工され寒天となって世界中に輸出され日本の有力な輸出品となっていたことがわかってきました。

ご存知の通り、沖縄は1879年、台湾は1895年に、いわば遅れて日本になった地域です。日本の領土となった台湾のテングサ漁場では、当時の言葉で「三等国民」と呼ばれた台湾の人々が漁をしていました。そこへ、「二等国民」と呼ばれていた沖縄の人々がやってきて台湾の人々と争いながらテングサを採取し、「一等国民」である「内地人」がそのテングサを使って利益を得ていました。実は沖縄にはテングサは分布していま



テングサ漁を行う台湾の海女さん
(出典：神奈川大学国際常民文化研究機構編
『台湾の「海女（ハイルー）に関する民族誌的研究』
国際常民文化研究叢書より引用)

せん。なので、沖縄の漁師たちは台湾の地でテングサ漁の技術を体得し、台湾の女性たちが沖縄の人々から技術を受け継いだことで、海女が生まれたのです。テングサを巡り、台湾や沖縄の人々、日本がどのように異文化交流したのか、テングサはどのように世界に広がっていったのか、を知りたいと思います。

3. おわりに

国際日本学部はCross-Cultural II 文化交流を学びの根幹にしています。そう言われると気構えってしまうかもしれません。ですが、初めての街や国

などへ出かけ、知らない場所をうろろし、知らない物を食べたり飲んだりしてみてください。意外な発見があるはずです。そのような気軽な一歩からも意外な文化交流のネタが見つかり、それを追いかけるはめになるかもしれませんよ。どうか楽しみながら大学生活を送ってください。

注

関心があれば調べてみてください。

(1) 神奈川大学は世界有数の国策紙芝居コレクションを有しています。非文字資料研究センター
HP: <http://himojikanagawa-u.ac.jp/index.html>

(2) 植民地台湾では1930年以降、同化が「(日本) 民族への同化」へと性質が変化したと指摘されています。陳培豊『同化』の同床異夢』三元社、2010年・298-299

(3) 神奈川大学国際常民文化研究機構編『台湾の「海女（ハイルー）に関する民族誌的研究』神奈川大学国際常民文化研究機構、2022年

(4) 国民を「一等」「二等」「三等」と差別することは公的なものではありませんでした。しかし、「内地人が一等国民、沖縄人が二等国民、台湾人が三等国民」という語りは、植民地台湾で育った台湾の人々の語りからよく聞かれる表現であり、実態としては差別が存在していたことがわかります。柴公也「日本統治時代の台湾生活誌（VI）」『海外事情研究』第41巻第2号、2014年・99